アメリカ軍事戦略とアジア重視

―アメリカ帝国の歴史の連続性・継続性をめぐって

太田　昌国

詩人、岩田宏に「グアンタナモ」と題する作品がある。いま私の手もとにあるのは、詩画集『グアンタナモ』で、池田龍雄の画が入っている。遠い記憶をたどれば、この詩は、いまはなき書評紙『日本読書新聞』の一九六二年か六三年の正月号が初出だったような気がするが、今回は確認できなかった。当時の日刊紙を読む機会もつくれなかったから、六〇年以上も前の出来事に触れるにしては臨場感も乏しいままに、史実に関しては幾冊かの関連書に基づいて確認して、以下を書き留めておきたい。

グアンタナモ／われわれの夢のかけら／命令はつねにあからさまだ／すべての事件は　あいまいな事件すら／地球の市場の明るみに出荷される／今どき暗い横町を摺足で走るのは／こそどろや色事師だけだろう／単なる商人ではない／この惑星の／劣悪な経営者が君らに命令を下す

グアンタナモ　夢のかけら／おい！

海岸の醜い泡に／おびただしい兵器や性器や計器に／冷たい大理石の巨きなカウンターに／何度さわったか思いおこしてくれ／きみらの試みは無力なバナナだったか／投網は何時も夜光虫を逃がしたか／重病人はゆるされたか

詩人は何を謳ったのか。グアンタナモとは何を指すのか。

グアンタナモは、知る人ぞ知る、キューバ東部にある地名である。そこには米海軍基地が――岩田宏がこの詩を書いた一九六〇年代初頭の頃も、それから六〇数年後の二〇二六年の現在もなお――ある。グアンタナモは、スペイン人に征服・植民地化される以前からキューバ島に住んでいた先住民族の言語で、「川に挟まれた土地」を意味するという。一九五九年、米国の支援を受けていたバチスタ独裁政権を打倒する革命が起きてから数年後、米国による政治的・経済的支配を断ち切る社会革命が進行中のキューバに、なぜ、米海軍基地があったのか。いつから、あったのか。遠く東アジアに住む詩人は、なぜ、なぜその地名を表題とする詩を書いたのか。いくつかの疑問を解いてみる。

一九六二年一〇月、ケネディ政権下の米国は、キューバにソ連が中距離ミサイルの発射装置を設置したことを偵察機によって察知した。ケネディは新たなミサイルの搬入を阻止するために、キューバを海上封鎖する措置を取り、ソ連に対し、ミサイルを撤去するか、戦争の危険を冒すか、と選択を迫った。私もはっきりと覚えているが、核戦争が今にも起こり得るという切迫した危機感をもたざるを得ないような状況だった。ソ連首相のフルシチョフはケネディと妥協する道を選んだ。キューバ側とは何らの協議を行なうこともなく、その頭越しに。

その一連の経過は、日々刻々と報道された。この一年半前の一九六一年四月には、米国ＣＩＡ（中央情報局）が画策し、亡命キューバ人の反革命軍と米軍が加わった空港爆撃やヒロン浜への上陸作戦が行なわれている。作戦が成就した後には傀儡政権の樹立を目論んでいたＣＩＡ主導のこの計画は、アイゼンハワー前大統領政権下で始まり、一九六一年一月に就任したばかりのケネディはこれを引き継いで、直ちに実施した。独裁政権打倒を戦ったキューバ反乱軍と民兵部隊は七二時間以内に侵攻部隊を

撃破した。米国にとっては屈辱的な失敗に帰した。三ヵ月前の就任演説でケネディは語っている。「近隣諸国の皆さんに知ってほしいのは、南北アメリカ大陸においていかなる国に対する侵略や政府転覆の試みがあろうとも、私たちは近隣諸国と協力してそれを阻止するということです。他のすべての国にも申し上げておきましょう。西半球のことは西半球が自家の主人であります」（一九六一年一月二〇日、第35代大統領就任演説）。

なるほど、ヒロン浜上陸作戦に従事した傭兵部隊は、当時の政権が米国の言いなりだったグアテマラとニカラグアなどの「近隣諸国と協力して」軍事訓練を施され、そこからキューバに向けて発進し、「侵略や政府転覆の試み」をしたのだった。先のメッセージの発信者と、就任三カ月後にこの軍事作戦を指令した者とは同一人物だ。同じ人間がこの二つの言動の主体であるなら、本来ならあまりの自己矛盾に悶え苦しむはずだが、米国大統領に限っては、決してそうはならない。「西半球の主人」は、他の三〇数ヵ国の存在は無視して、唯一「米国」でしかないと信じ込み、自己を疑うことを知らないからだ。自己懐疑を知らぬ、この無限の自己肯定観には、聞き覚え／見覚えがある。一八二三年当時の第5代大統領、ジェイムズ・モンローが発したモンロー・ドクトリン（教義）である。

米国の独立（一七七六年）から半世紀近くが経とうとする一八一〇年代から二〇年代にかけて、米国以南のアメリカ大陸の国々が三世紀に及んだスペインによる植民地支配を脱して次々と独立する情勢を前に、モンローはこう述べたのだった――「ヨーロッパの同盟諸列強の政治制度は、アメリカのそれとは本質的に異なっています。この違いは、それぞれの政府の内側にある差異に由来するものです。われわれ自身の政府は、甚大な血と財貨の犠牲によって打ち立てられ、最も開明的な国民の知恵によって成熟し、その下でわれわれは前例のない幸福を享受しているのです。ですから全てのアメリカ国民はあげてこの政府の防衛に献身しているのです。したがってわれわれは、率直に、また合州国と諸列強との間の友好的関係に恃んで、以下のように宣言します。すなわちわが国は、諸列強による、その政治制度をこの西半球のいかなる部分に対してであれ膨張しようとする試みは、これをすべてわが国の平和と安全にとって危険であるとみなすということです（中略）。独立を宣言し、維持し、わが国が多大の検討の末に正義の原則に基づいて承認した（中南米の：引用者注）政府については、ヨーロッパのどの国であろうと、当の政府を抑圧したり、その行く末を何らかの他のやり方で統制したりする目的をもって介入するならば、我々はそれを合州国に対する非友好的な態度の表明とみなすほかはありません」（一八二三年一二月二日、第七次年次教書）。

「西半球」＝「米国」では、ない。前者は三〇数ヵ国から成り、「西半球のことは西半球が自家の主人だ」と言えるためには、最小限でも、この多数の諸国の利害調整を公平・対等の原則に基づいてなし得る多国間機構がなければならない。それなしのまま、西半球で起こることは直ちに米国の安全保障に直結すると捉え、かつその後に「警察力」の行使を躊躇うことがないというのが、時代を越えて変わらぬ米国の本質なのだ。

ここで、岩田宏の詩「グアンタナモ」に戻ろう。ケネディが大統領に就任して一、二年目の六〇年代初頭、軍事侵攻とミサイル危機が続き、カリブ海の小さな島国・キューバはメディアの大きな話題となったことだろう。キューバ・米国間には緊張関係もある。米国は一九六一年一月三日にキューバとの断交に踏み切ったばかりだ。それらを報道すれば、当然にも、米国はキューバ東部に海軍基地を持つことにも触

れるだろう。そんな時、詩人は初めて「グアンタナモ」の名に触れたのではなかったか。当時の情報量は少なかったではあろうが、知れば知るほど、小国が強いられる不条理な現実に引きつけられ、想像力を駆使して、詩作品に昇華させたのではないか。詩人が選んだ言葉には、大国の横暴によって引き裂かれた世界の危機と矛盾が集約されているかのようなキューバに対する深い思いが、上っ面な政治的言語によってではなく、印象的な暗喩によって表現されている。

なぜ、グアンタナモは不条理の象徴なのか？　それを知るためには、モンローとケネディの間を繋ぐ、二〇世紀初頭のもうひとりの米国大統領を介在させなければならない。第26代大統領、セオドア・ローズヴェルト（在任一九〇一～〇九年）の治下において、スペインから独立したばかりのキューバは米国の属国とさせられた。一九〇一年、キューバ議会が可決した新憲法に対して、米国議会はそれに「付加されるべき」諸条項を採択した。それには「米国がキューバの独立を維持し、その人民を保護できるようにするために、また米国自身の防衛のために、キューバ政府は米国大統領との間に合意をみた特定の地点において、貯炭地または海軍基地の設置に必要な土地を米国に売却あるいは貸与する」とする第7条があった。キューバ議会は抵抗し、「ノー！」と叫ぶデモも各地で繰り広げられた。受け入れなければ全島を占領するぞ、との脅しが米国からはなされた。こうして、一九〇三年、グアンタナモ湾周辺の一一七平方キロの土地は「米国が必要とする限り」海軍基地として利用できる現実が生まれたのだ。その「使用権」は両国政府の合意でのみ変更され得る規定だから、一九五九年革命後のキューバ政府の返還要求を無視して、米軍は居座り続けている。この基地は、すでに一二三年もの歴史を刻んでいることになる。不条理の極致だと言える。

ドナルド・トランプの言動は、確かに、堪え難いほどに、ひどい。まだ三年近くもの間、この人物の顔と暴言が世界を攪乱するかと思うと、堪らない。一刻も早く消え去ってほしい。だが、ケネディやバラク・オバマならば、いくらかは優し気な言い換えで包み隠したかもしれない言葉の背後で、歴代米国政府は何をやって来たか。トランプの異形さや奇矯さに目を奪われて、アメリカ帝国の歴史の連続性・継続性を透視しない愚を犯したくない。

【参考文献】
岩田宏＋画：池田龍雄『詩画集　グアンタナモ』（思潮社、一九六四年）
キューバ共和国外務省「ある略奪の歴史―グアンタナモ米海軍基地」（日本共産党中央機関誌編集委員会編『世界政治資料』一九八〇年一月上旬号）
イグナシオ・ラモネ『フィデル・カストロ―みずから語る革命家人生』上・下（岩波書店、伊高浩昭訳、二〇一一年）
渡邊優『グアンタナモ―アメリカ・キューバ関係にささった棘』（彩流社、二〇二〇年）
古谷旬・三浦俊章編訳『アメリカ大統領演説集』（岩波文庫、二〇二五年）

（おおた・まさくに／編集者、民族問題研究）

訂正とお詫び

本誌213号の下記記事に誤りがありました。訂正しお詫び申し上げます。

●吉岡忍「国を超え社会を起動する」17頁中段21行目
（誤）久米武邦　⇩（正）久米邦武